二〇一二年九月一五日

真っ直ぐな道どこまでも鰯雲　うつぎ
天守まで届く太鼓や秋澄める　せいじ
ＳＬを撮らんとすれば葛匂ふ　よし女
神鹿の吾を映せる瞳かな　さつき
弥陀の庭いづくに佇つも萩の風　菜々

二〇一二年九月一四日

柴折戸を全開したる萩の庭　きづな
敬老日小さき手もて肩叩き　有香
秋茜群るる芝生の中空に　わかば
爽やかやワイン試飲おかはりす　なつき
紅白の萩に妹背の句碑びらき　菜々
湯気匂ひくる炊きたての栗御飯　あさこ

二〇一二年九月一三日

左右の田の苅られ拓けし里の道　こすもす
萩がくれなるこの寺の句碑数多　はく子
萩日和ほとけに開くる花頭窓　菜々
水底にやもり踏ん張り池澄める　なつき
萩こぼる風化にやせし石仏　うつぎ
と見る間に下界隠るる山の霧　宏虎
参道の萩こぼさじと袂抱き　きづな
三河湾落つる夕日に雁渡る　つくし
エンジンの音高らかに稲を刈る　三刀

二〇一二年九月一二日

遠近に籾焼く煙峡の里　よし子
秋潮につつかれ揺るる舫舟　あさこ
蹲踞にさざなみ立てて初あらし　菜々
秋気澄む刈込み鋏機嫌よし　せいじ
命令す運動会のスピーカー　三刀
つくつくし汝も婚礼を寿ぐか　よし女
新涼の木洩れ日遊ぶ朝の卓　せいじ

二〇一二年九月一一日

名調子なれども虫の名は知らず　雅流
秋天へ婚儀開始の神鼓鳴る　よし女
衝突もせず乱れ飛ぶ赤蜻蛉　治男

二〇一二年九月一〇日

古都の秋竹ひと節を投句箱　雅流
爽やかや寝返り出來し児の笑顔　有香
抱き起こし出水汚れの稲を刈る　ともえ
衣被九谷の皿に堆く　よし子
風籟に葛の香匂ふ山路かな　百合
どの家も青柿太る過疎の村　はく子
背高の萩に埋もる庵かな　ひかり
秋簾巻き上げ続く長話　満天
愚痴ならず声にして読む秋灯下　うつぎ

二〇一二年九月九日

マジシャンに拍手喝采敬老日　なつき
しだれ萩裏参道を通せんぼ　ぽんこ
話し居る二人と見しは案山子かな　うつぎ
ちちろ鳴く襖へだてに看取りの夜　菜々

毎日句会みのる選・二〇一二年九月一七日